

井戸山遺跡 確認調査報告書

1991年

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

井戸山遺跡 確認調査報告書

1991年

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序

土浦市は太古から水と緑に恵まれ、人々が住むのに適したところです。そのため市内には多くの遺跡が所在しております。その中でも市街地の北東に位置する手野町の台地は、南に霞ヶ浦をのぞみ、特に多くの遺跡が発見されています。

この台地上には、古くから「井戸山」と呼ばれるすり鉢状の大きな崖地があります。これはかつて、台地上に人々が築いた時代の大型の共同井戸と考えられています。このような井戸跡は県内に類例がなく、大変貴重な遺跡と考えられます。

市の貴重な文化財を保護・活用し、後世に伝えることは私たちの重要な責務であります。

このたび本市では、井戸山遺跡の性格や規模を明らかにするため、学術調査を実施することになりました。この調査によって、常総地域の古代文化の発明にいささかなりとも役立てて頂ければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発行にあたり地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

土浦市教育委員会

教育長 青木利次

例　　言

- 1、本書は茨城県土浦市手野町字井戸山2875に所在する井戸山遺跡の確認調査に関する学術調査報告書である。
- 2、この調査は土浦市教育委員会の委託を受けて、土浦市遺跡調査会が平成2年7月4日から同年8月1日まで行った。
- 3、本書の原稿執筆は出土遺物を橋場君男が担当し、これ以外を関口満が担当した。本書の編集は関口が行った。
- 4、写真撮影は塩谷修が担当し、遺物の実測・トレイスは國井弘紀が担当した。遺構図版は関口が担当し、遺物図版は黒澤春彦が担当した。
- 5、本書に掲載した写真の縮尺は不同である。遺構は全体図が200分の1で部分的な遺構図・土層図は50分の1である。遺物は3分の1の縮尺である。
- 6、土浦市遺跡調査会組織

会長	永山　正	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青木　利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木　雅博	土浦市文化財保護審議会委員
タ	雨貝　宏	土浦市建築指導課長
タ	横田　紀夫	土浦市耕地課長
監事	藤枝　正	土浦市教育委員会次長
タ	滝ヶ崎洋之	土浦市企画部次長
幹事	田中　紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長
タ	岩沢　茂	タ　　課長補佐
タ	加倉井藤雄	タ　　文化係長
タ	石山　淳一	タ　　主幹
タ	石川　功	タ　　主事
タ	黒澤　春彦	タ　　タ
タ	中澤　達也	タ　　タ
タ	関口　満	タ　　臨時職員
タ	塩谷　修	土浦市立博物館学芸員
(現地調査)	調査主任	塩谷　修
調査員	石川　功	関口　満
調査作業員	小島治夫	園城寺弘　円城寺敏次　中島チヨノ　長谷川ふみえ
		園城寺とも　大塚利夫　長嶺道子　中村節子
(整理調査)	調査主任	塩谷　修
調査員	関口　満	
	調査補助員	國井弘紀(筑波大学大学院生) 橋場君男(慶應大学学生)
事務局	土浦市教育委員会	
6、	発掘調査から報告書作成までの間、下記の人々、諸機関から多大な御指導、御協力を賜った。記して厚く謝意を表するものである。ならびに、調査参加者及び協力者名を掲載した。	
	調査協力者	雨谷　昭、鈴木公雄、高野昭雄、羽村町教育委員会、府中市郷土の森博物館
7、	航空写真は国土地理院(1975年撮影)のものを使用した。	
8、	本遺跡にかかる遺物・写真・図面は土浦市立博物館にて収蔵している。	

凡　　例

1、井戸山遺跡で確認された井戸跡の構造は、以下のA井戸側部、B窪地部、C土堤からなる。

A井戸側部 井戸を作る目的の中核部分であり、掘削の危険防止及び井戸側の強度保持の役割を果す。

a 1 井戸側 現状は黒色土よりなり、本来は木質部材からなると考えられる方形枠状のものと思われる。

a 2 井戸側掘り方 井戸側構築のため、窪地掘り方を不整円形により深く掘り込んだもの。

a 3 裏込め 井戸側構築のため、井戸側と井戸側掘り方の間を埋めた土。

B窪地部 井戸側構築のための事前的な掘り込み、または井戸使用時の付属施設とも考えられる。

b 1 窪地 調査前の窪地。

b 2 窪地掘り方 窪地内の堆積土を取り除いた掘り方で、人為的に掘り込まれたものである。

b 3 窪地覆土 窪地内堆積土で窪地掘り方までの覆土。

C土堤 井戸の付属施設、または窪地掘り方を掘削した時の残土とも考えられるもの。

この他、現状では未確認のものとして、以下のものなどがあげられる。

・井桁 水を汲む人の安全をはかり、污水の流入を防ぐための地上施設。

・水溜 水を溜める施設。

・昇降施設 地上から井戸まで登り下りするための施設。

井戸の構造上の名称は、(宇野1982)の部分名称を参考にして使用し、本遺跡に合わせて新たに設定している。

参考文献 宇野隆夫「井戸考」『史林』

65-5 1982

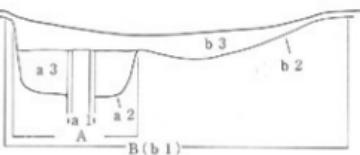
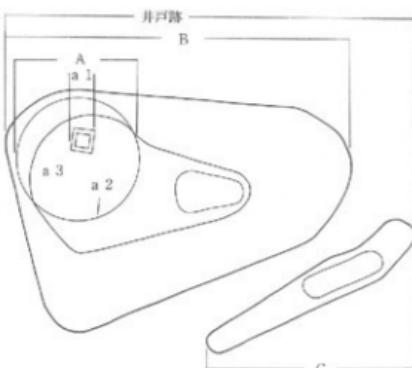
2、本文図版中のトーンは下記の意味で使用した。

井 戸 側

井 戸 使用 時

の 使 用 面

3、遺物図版番号と遺物写真図版番号は一致する。



目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
1. 調査に至る経緯	1 P
2. 調査経過	1
3. 遺跡の立地と環境	2
4. 遺跡の歴史的環境	4
5. 遺跡の内容	6
現状	6
トレンチの設定状況	6
各トレンチの状況	6
第1トレンチ	6
第2トレンチ	10
井戸の構造と特徴	10
6. 出土遺物	14
7. 調査のまとめ	23

写 真 図 版

P L 1	遺跡周辺航空写真
P L 2	遺跡近景（南より）
	遺跡近景（北より）
P L 3	第1トレンチ調査状況（西より）
	第1トレンチ内遺物出土状況
P L 4	第2トレンチ土層堆積状況（東壁）
	第2トレンチ井戸側検出状況（南より）
P L 5	第2トレンチ井戸側検出状況（東より）
	井戸側内の涌水状況
P L 6	第1トレンチ調査作業状況（西より）
	井戸山遺跡発掘調査現地説明会
P L 7	第1トレンチ出土遺物（表）
	第1トレンチ出土遺物（裏）
P L 8	第1、2トレンチ出土遺物（表）
	第1、2トレンチ出土遺物（裏）
P L 9	第1トレンチ出土遺物
P L 10	第1トレンチ出土遺物
P L 11	第2トレンチ出土遺物
P L 12	第2トレンチ出土遺物

図 版

第1図	遺跡位置図
第2図	周辺の遺跡位置図
第3図	遺跡現況平面図
第4図	トレンチ設定図
第5図	遺跡断面図
第6図	井戸側部平面図
第7図	第2トレンチ土層断面図
第8図	第1、2トレンチ土層断面図
第9図	第1トレンチ出土遺物（1）
第10図	第1トレンチ出土遺物（2）
第11図	第1トレンチ出土遺物（3）
第12図	第2トレンチ出土遺物（1）
第13図	第2トレンチ出土遺物（2）

報告書抄録

フリガナ	いどやまいせきかくにんちょうさほうこくしょ										
書名	井戸山遺跡確認調査報告書										
副書名											
卷次											
シリーズ名											
編集者名	間口 満	著者名	間口 満 橋場君男								
編集機関	土浦市遺跡調査会 〒300 土浦市下高津2-7-36 土浦市教育委員会内 0298(26)3484										
発行機関	土浦市教育委員会 〒300			同 上							
発行年月日	1991年3月31日										
フリガナ	フリガナ	コード									
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積				
いどやまいせき 井戸山遺跡	茨城県土浦市手野町 あざいどやま 字井戸山2875番地	08-203	D-32	36度 5分 40秒	140度 7分 10秒	平成2年7月4日 ~8月1日	約54m ² 学術調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項						
井戸山遺跡	井戸跡	中世・近世	井戸跡	内耳土器・土師質土器・陶磁器・石臼・砥石・天保通寶・寛永通寶	「まいまいはず井戸」に類似した形態・構造を持つ井戸跡						

1. 調査に至る経緯

井戸山遺跡は、1981～83年の市教委による埋蔵文化財分布調査により、遺跡として登録されている。分布調査の所見によれば、「八坂神社の東方約50mのところにあり、全体的に雑木により覆われている。南側は道路に面しスリバチ状を呈しているが、他の三方向はゴミ捨場となってかなり埋没している。(中略) 井戸のスリバチ底までの深さ約10mで全体にスギ・クヌギ・カヤ・カシなどがあり、荒れるにまかせている。近世の共同井戸と思われ、県内にあまり類例がなく調査をして復元したいものである。」と記されている。

このような井戸の形態に類似するものとして「まいまいす井戸」と呼ばれる形態を持つ井戸がある。東京都西部から埼玉県を中心にその存在が知られている。その形態的特徴は①「地面向り鉢状に掘り窪めた形」、②「掘り窪めた内側を巻くように、登り下りするための道がつくられている。」という文字どおり「まいまい」の名称の由来となる特徴である。具体例として埼玉県狭山市北入り口の「七曲井」、東京都羽村町五ノ神の例などがある。

今回調査の対象となった井戸山遺跡についても、上記例と類似した特徴を持つ井戸ではないかと從来より注目されていたが、それを裏付ける文献資料などは現在まで伝わっていない。土浦市文化財保護審議会でも同遺跡が取り上げられ、平成2年7月4日から同年8月1日にかけて、土浦市教育委員会の委託を受け土浦市遺跡調査会が発掘調査を実施した。調査は、井戸山遺跡という名称にも残る井戸の確認と、井戸の構造の解明に主眼をおいて、トレンチ調査を行った。

参考文献 土浦市教育委員会『土浦の遺跡』1984

狭山市教育委員会『七曲井—復元発掘の記録』1974

2. 調査経過

調査にあたり6月25日から30日まで井戸山遺跡窪地内の清掃を行う。7月4日から本格的な調査に入り、基準杭を打ちコンタ図作成を行う。7月5日には第1トレンチを設定して探削を開始した。廃土はベルトコンベアを使用して窪地外へ搬出した。7月10日第2トレンチの調査を開始する。7月11日に第1トレンチ内地山面の精査を行ったが、井戸らしき痕跡は確認されなかつた。7月17日レベル移動を行う。原点は新学幼稚園裏にあるものを使用した。7月19日第1トレンチ北壁上層図面実測を行う。7月23日第2トレンチの斜面部では地山が確認されたが、窪地底面では地山が確認されず、サブトレンチを設定して一部を深掘りする。7月25日第1トレンチではトレンチの拡張を行った。第2トレンチ内のサブトレンチで井戸櫛と想定できる黒色土が確認され、井戸であることが確認された。7月21日から31日まで遺構平面図・土層断面図などの実測や写真撮影を行った。8月1日には一般市民向けの現地説明会を行った。調査終了後に井戸跡・トレンチの埋め戻しを行った。井戸跡には塩化ビニールパイプを埋設して「息抜き」用とした。

3. 遺跡の立地と環境

地 理 (第1、2図)

井戸山遺跡は、土浦市手野町宇井戸山2875に所在する。

土浦市は地形的に見て、市内を流れ霞ヶ浦に注ぐ桜川によって出来た沖積低地、その北側の新治台地、桜川低地の南側の筑波台地とに分けられる。当遺跡の所在する手野町は市街地より見て北東部にあたり、新治台地南岸及び霞ヶ浦湖岸まで広がる沖積低地を包括する。手野町付近の台地は境川の西流により、独立した標高約26mの小台地状を呈し、境川及び霞ヶ浦に面した台地縁辺には谷が幾筋か入り込んでいる。

手野町付近の霞ヶ浦に面した広大な低地は、現在ほとんどが連田として利用され、冬になるといたる所でレンコン掘りの姿が見られ、全国でも有数のレンコンの産地となっている。

台地上はほとんどが畠地として利用されている。以前は養蚕が盛んであったため、いたるところで桑が栽培されたが、現在は廃れてしまっている。集落は台地上を東西に走る県道土浦・大洋線に沿ってが点在するが、その中心はむしろ霞ヶ浦に面した台地斜面部から沖積地に至る場所にあり、帯状に家々が密集して建ち並んでいる。

井戸山遺跡は境川により開析された台地中央部に位置し、その南東方向は田村川により開析された谷の谷頭にあたる。

地 質 (第1図)

本地域の基盤には手野層とも呼ばれる海成堆積の砂粒で構成される層があり、この上に成田層がある。下部は灰色を呈する中砂粒で上部は中粒の砂粒によりなる。成田層からはしばしば貝の化石が産出することがあり、近年田村・沖宿区画整理事業地内からトウキョウホタテなどの貝化石が産出している。霞ヶ浦沿岸の出島村崎浜ではカキ化石床が露出している。この上層には竜ヶ崎砂疊層・常総粘土層・関東ローム層・表土が順次堆積している。竜ヶ崎砂疊層は褐色の疊混じりの層で、古東京湾の海退時の堆積物とされる。常総粘土層は上半部が青灰色で緻密であり、下半部は灰白色でやや砂質になっている。関東ローム層は風成堆積層で、層厚は厚いところで1.5m、通常は1m前後である。ローム層の中位程度には始良・丹沢火山灰の火山ガラスが含まれる。また同地域のローム層中に鹿沼バミスは明瞭に見られない。

井戸山遺跡がある台地上には、遺跡近接地も含めて数箇所に大きな窪地が見られる。この窪地は深さ約1mをはかり、第2トレンチの観察によれば、削平をうけている可能性も考えられる。これがどのような成因によってできたものかは不明である。



第1図 遺跡位置図

4. 遺跡の歴史的環境（第2図）

土浦市でも霞ヶ浦北岸の手野町を含む上大津地区は数多くの遺跡が確認されており、特に縄文時代から古墳時代の遺物を包含するものが多い。

旧石器時代の遺跡は、田村・沖宿区画整理事業地内の寺畠遺跡から、石器群・焼土址・炭化物集中域が確認された。

縄文時代の遺跡の特徴は、縄文時代前期から中期の土器片が多く表採されている。No16のゴリシ山遺跡の発掘調査の結果、遺構は確認されなかったものの縄文時代早期三戸式・田戸下層式がまとまって出土している。また未報告ではあるが押型文土器の小破片が表採されている。No14の弁ノ内遺跡からは早期の炉穴が二基発見された。

弥生時代の遺跡は非常に少ないが、No14弁ノ内遺跡からは竪穴式住居跡が一軒確認され、大型の住居跡のようで長軸は不明であるが短軸は7mもある。この住居跡の年代は、出土した土器により、弥生時代後期前半に位置付けられている。

古墳時代ではNo6・8が土浦市指定文化財の后塚・王塚古墳であり、1980年に墳丘測量調査が実施された。后塚古墳は全長約54mの前方後方墳であり、王塚古墳は全長約84mの前方後円墳である。同地域の有力な首長の墓と考えられている。この他No19下郷古墳群、No21田村船塚古墳群などが存在する。集落遺跡としてはNo4五斗落遺跡、No5大僅遺跡、No20真木の内遺跡が調査されている。五斗落遺跡出土の古墳時代前期の竪穴式住居跡にはかに土器が埋設されており、同期の埋設例としては珍しい例といえる。大僅遺跡出土古墳時代後期の竪穴住居跡の中にはカマドと対面する壁に「張出しピット」が作られているものも見られる。

奈良・平安時代の遺跡としてはNo4五斗落遺跡、No5大僅遺跡、No14弁ノ内遺跡が調査されている。五斗落遺跡や大僅遺跡では奈良時代から平安時代の竪穴式住居跡が確認され、弁ノ内遺跡では平安時代の住居跡が検出された。

中近世の遺跡については、井戸山遺跡の近接地は陶磁器が散布しており、シジミを主体とした地点貝塚も數ヶ所見られる。周辺にはNo1の市指定文化財手野城跡があり、現在でも土壘・堀などが残っている。手野城は小田氏五代宗知の第三子知貞によって築城されたと言われる。No20真木の内遺跡の溝の覆土からは、室町時代の土師質の内耳鍋が出土した。また手野町の台地上からは耕作中に、在地産の甕に入れられた埋蔵鏡が二か所で出土している。

この他手野町地内には比較的多くの神社仏閣があり、寺としてはNo2法光院・No7薬王院・No9常福寺・No11専光寺・No12空禪寺・No13正東院があり、神社としてNo3鹿島神社・No17八坂神社がある。No15は薬師遺跡でこの中に塚が2基存在する。

参考文献 財團法人茨城県教育財團「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 五斗落遺跡他五遺跡」1987



第2図 周辺の遺跡位置図

5. 遺跡の内容

現 状（第1、3、5図）

井戸山遺跡の発掘調査前の状況は、杉などの樹木が繁茂し、窪地内に北西及び南東方向から一般生活又は農業廃棄物が投棄されていた。廃棄物を取り除き、平板測量によるコンタ図作成の結果、第3図の井戸山遺跡現況図が得られた。等高線は50cm間隔を基準とし、部分的には25cmの等高線も使用している。遺跡の構造は大きく分けて、上面形が不整三角形の窪地とその南方に存在する土堤状の高まりからなる。この土堤のすぐ南側は芋穴として掘削されている。この掘削の跡に接して舗装された農道が東西に通っている。また、窪地上縁東側から北側、そして西側にかけては、木舗装の細い農道が存在し等高線が乱れている。

窪地上面形の主軸はおよそN-50°-Wにあり、主軸長は約25mを測る。この底辺の長さはおよそ18mである。南側土堤部分周辺を除き、等高線の流れは標高24.601mに端的なように北方向に聞く状況が見られる。このことは、遺跡の北側が一番標高が低く、遺跡北西方向に広がる窪地（第1図参照）との関連が伺える。窪地底面はほぼ梢円形を呈し、標高21.601mから22.601mの北西側の等高線は、間隔が広がり、傾斜が他の部分に比べ緩くなっていることが理解できる。最深部は標高21.090mを測り、ほぼ平坦な状況を呈する。土堤の最高位との比高差は5m50cmであり、窪地外北側との比高差は3m11cmである。窪地の傾斜については第5図中のa-a'ライン北西斜面で約30°、A-A'ライン北斜面で約12°、F-Gライン南斜面でともに約20°である。

トレンチ設定状況（第4図）

調査当初の予想では、井戸山遺跡の窪地最深部付近下から井戸に関する施設が確認されると考えられた。そのため第1トレンチを窪地底面の主軸方向に、幅2m・長さ7.7mで設定した。同トレンチの調査の進行に伴い2度にわたりて2m×2mの規模で拡張を行った。

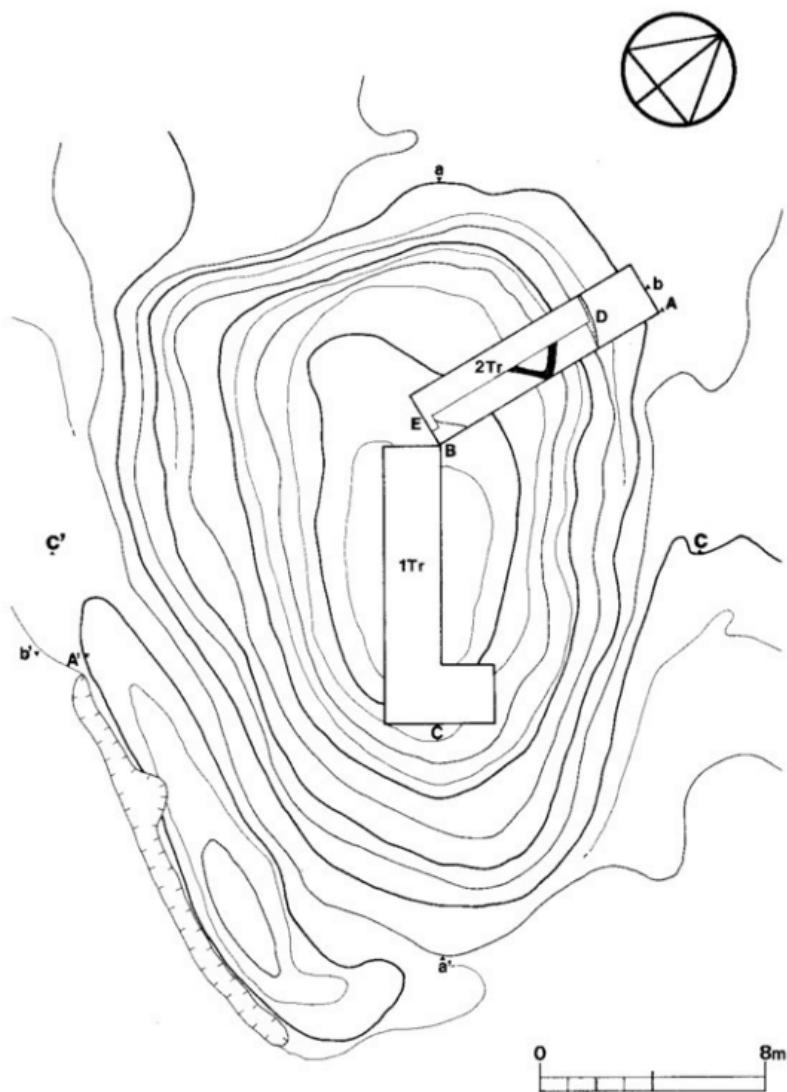
第2トレンチは第1トレンチの北側の隅に頂点を合わせ、主軸ライン（第1トレンチ北東壁）から120°北に振ったラインを基準線としてトレンチを設定した。同トレンチの規模は9.3m×2mである。両トレンチの調査の結果、第1トレンチは窪地掘り方まで掘り下を行なったが、井戸跡らしいものは何も確認されなかった。そして第2トレンチを掘り下げたところ、井戸跡が確認された。

第1トレンチ（第4～8図）

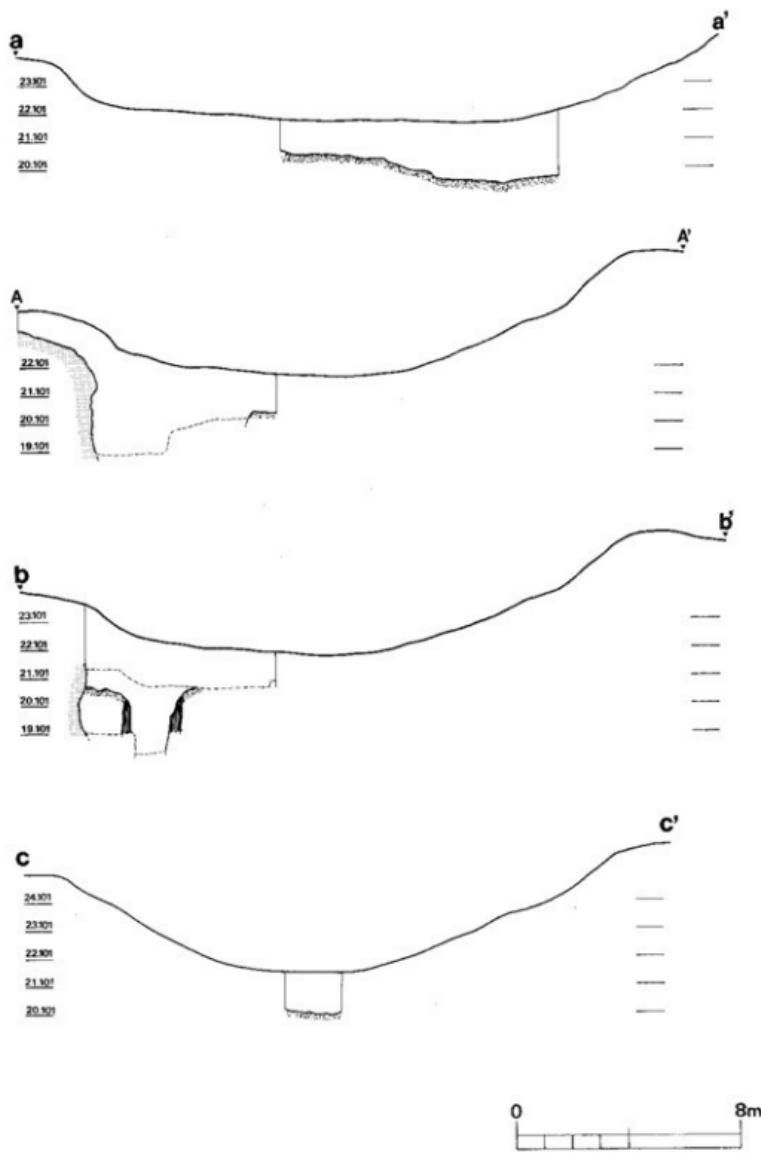
調査は人力により表土を排除するところから開始した。耕土はベルトコンベアにより窪地外に搬出した。第7・8図中の2層から5層を掘り下げている段階で陶磁器や天保通寶が出土した。2層と5層の層界は植物の根擾乱のせいか凹凸が見られた。以後トレンチ底面までの間には、17



第3図 遺跡現況平面図



第4図 トレンチ設定図



第5図 遺跡断面図

層のようにロームブロックの混入が見られ、埋め戻されたと考えられる土層も見られた。下層ほど黄白色粘土・黄白色砂の混入が多くなる。底面の状況は、トレンチ北西端から3.5m南東付近までは、青灰色・赤褐色の砂利層の窪地掘り方が傾斜をなし、トレンチ北西端から5m南東付近で傾斜が緩くなり細砂層と変わる。トレンチ北西端から7.7m付近で窪地地表面から深さ2.2mの最深部となり、傾斜が逆転する。最深部の地山は黄白色細砂層である。第8図の北東壁土層図中の空白部分は土層崩落によるものである。第1トレンチ内では、結果として井戸跡らしき痕跡は確認されなかった。しかしながら地上から5.5mもの深さにわたり、そして不整三角形の平面形で描り鉢状に掘り込まれていることが判明した。

遺物の出土状況（第9・10図）

出土遺物の中で第9図No1～5・7・9と第10図No12はトレンチ内中央付近の窪地覆土下層の18・19層から出土した。第10図No14・15、第11図No16・17は拡張したトレンチ内から出土した。

第2トレンチ（第4～8図）

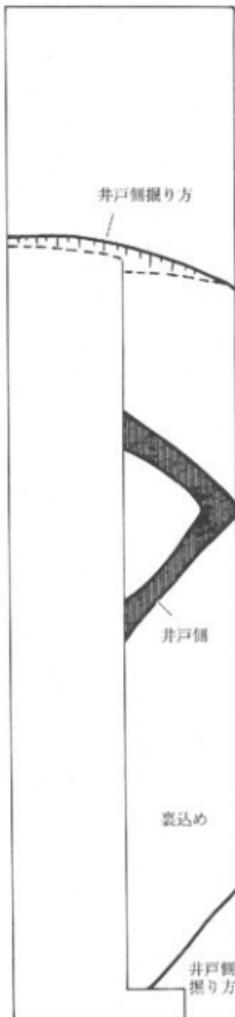
第2トレンチは北端から調査を開始した。同トレンチ内斜面部分の上層堆積状況は、表土下に3・4層が約30cmにわたり堆積し、窪地掘り方下の関東ローム層は薄く存在するのみで、すぐに粘土層に至る。これらの状況から同所の関東ローム層は人為的に削られていると考えられる。窪地掘り方の落ち込みはトレンチ北端から約2m南側ではほぼ垂直に落ち込む。この落ち込み地山層は標高21.101mレベルで粘土層から細砂礫層に変化する。トレンチの南端では窪地地表面から深さ約1.3mのところで細砂礫層の窪地掘り方が確認された。この窪地掘り方は北側に90cmのところで激しく落ち込む状況が観察された。同所において窪地掘り方と井戸側掘り方との重複関係はみられなかった。よって両者は同一時期に存在したものと言える。トレンチ内の東側に幅1mのサブトレンチを設定して井戸側掘り方内の土層を掘り下げた。その結果、標高20.101m付近に黒色土が確認された。最終的には、窪地地表面から約3.3mの深さまでの土層を排除した。そしてトレンチ内壁面・底面を精査すると、第6・8図のような平面形が「くの字状」、断面形が垂直方向に立つ黒色土が確認された。

この黒色土は、平面・断面形を総合的に考えると、平面形が方形を呈する棒状の構造物と考えられる。この棒状の構造物内の土層は、上層から流れ込むようにレンズ状の土層の堆積が確認された。この土層を排除すると、下層ほど水分が多く含まれ、その後水が滲み出で溜まるようになった。このような状況から本遺構を井戸の中樞部分の痕跡と考え、この黒色土の構造物は井戸側であると判断した。方形の平面形を呈する井戸側は、一辺が1.5m以上で角がほぼ直角をなすもので、厚さは20～26cmである。この井戸側については、ほぼ純粋な黒色土で構成され非常に粘性があり、構築当初は板材と思われ、その後木質が土壤化したものではないかと考えられる。しかしながら井戸側内の水が滲み出た部位でも、木質部分は確認されなかった。先の井戸側掘り方に

いては、井戸側を設けるにあたって先に掘り込まれたものである。この井戸側掘り方のトレンチ内の平面形は北側が弧を描き、南側は直線的であるが、本来の平面形は直径7m以上の不整円形を呈するものと推定される。この井戸側掘り方の深さについては現状のところ確認し得ていないが、同北壁の立上り（第8図第2トレンチセクション図）が下方ほど緩く湾曲している状況から考えれば、現状よりやや深い程度かも知れない。第2トレンチ東・西壁面の土層観察の結果、第27・33層とその直上の土層との間が明瞭に区別された。この上層は流れ込むような堆積の仕方で下層は複雑な堆積状況である。このことから、第27・33層より下層は井戸構築時の井戸側の裏込め土と思われ、上層の上層は井戸廃棄後の堆積土と考えられる。そして第27・33層の上面を井戸使用時の使用面と想定した。この使用面上の上層の第12・13・14などの土層は、井戸廃棄後の埋め戻しの土のようであり、ロームブロックなどが含まれる。特に井戸側内の土層については、しまりがなくボソボソしており、廃棄後一期に埋め戻しがなされたようである。

遺物の出土状況（第11～13図）

第2トレンチ出土遺物のほとんどは、井戸使用面上層の堆積土層中から出土した。しかしながら第12図No7のみは井戸側の裏込め土中から出土した。第13図No8・10は使用面付近から出土したものである。

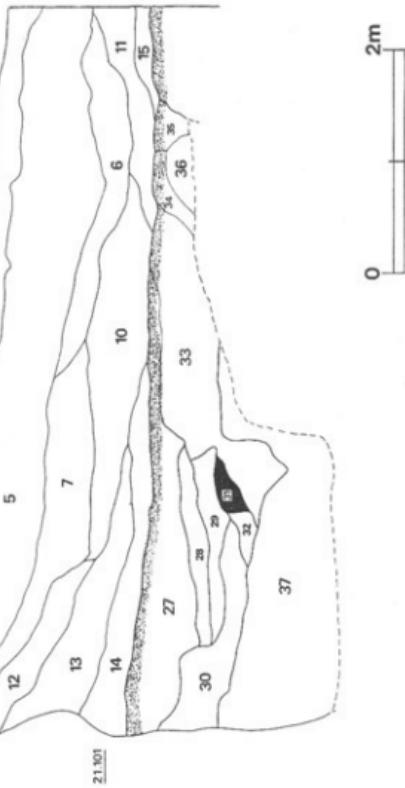


第6図 井戸側部平面図

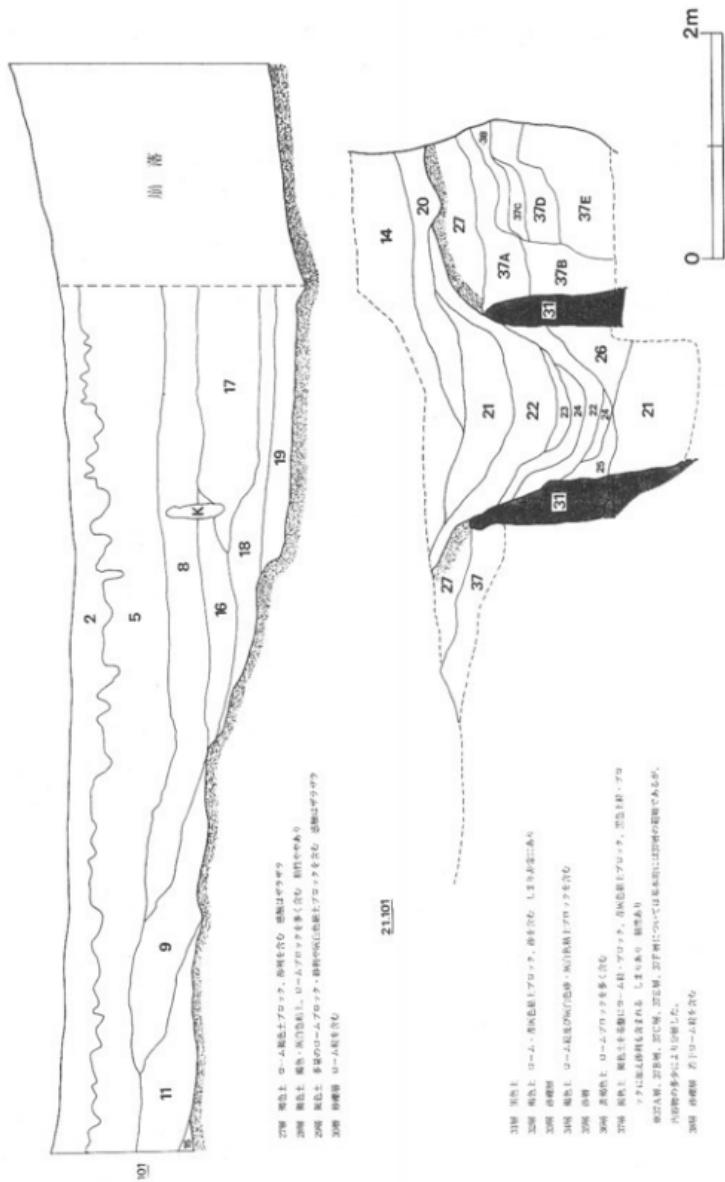
井戸山測地 土層記

1層： 砂利水のローム層を基盤に有る
 2層： 砂利水の瓦上に細粒の砂がつい、ボトムア
 3層： 黄褐色、ローム層がホルムガットを多く含む
 4層： 鹿土、ローム、粘土を含む
 5層： 鹿土、ロームを含む、ガラガラ
 6層： 鹿土、ローム、泥炭を含む
 7層： 鹿土、ロームを含む、砂利を含む
 8層： 鹿土、ロームを含む、砂利を含む
 9層： 砂利水に砂利を含める、砂利はガラガラ
 10層： 砂利水に砂利を含む、砂利はガラガラ
 11層： 鹿土、砂利の多い鹿土、砂利を含む
 12層： 鹿土、砂利を含む
 13層： 鹿土、砂利を含む
 14層： 鹿土、砂利を含む
 15層： 鹿土、砂利を含む
 16層： 鹿土、砂利を含む
 17層： 鹿土、砂利を含む
 18層： 鹿土、砂利を含む
 19層： 鹿土、砂利を含む
 20層： 鹿土、砂利を含む
 21層： 鹿土、砂利を含む
 22層： 鹿土、砂利を含む
 23層： 鹿土、砂利を含む
 24層： 鹿土、砂利を含む
 25層： 鹿土、砂利を含む
 26層： 鹿土、砂利を含む
 27層： 鹿土、砂利を含む
 28層： 鹿土、砂利を含む
 29層： 鹿土、砂利を含む
 30層： 鹿土、砂利を含む
 31層： 鹿土、砂利を含む
 32層： 鹿土、砂利を含む
 33層： 鹿土、砂利を含む
 34層： 鹿土、砂利を含む
 35層： 鹿土、砂利を含む
 36層： 鹿土、砂利を含む
 37層： 鹿土、砂利を含む

23.00



第7図 第2トレーンチ土層断面図



第8図 第1、2トレンチ土層断面図

6. 出土遺物（第9～13図）

井戸山遺跡から出土した遺物には、土器・陶器・磁器・石製品（石皿・石臼など）・鉄製品・近現代の瓦などがある。その総量は、プラスチック製収納箱にして2箱分である。

これらの遺物の中で、実測に耐えうるものを取捨選択したものが次の第9図より第13図である。以下、国版番号に従い観察所見を述べる。

第9図は、第1トレンチより出土した資料である。同図中1より5は、所謂中世後半の土師質土器内耳鍋の口縁部である。3～5は15世紀後半～16世紀代の内耳鍋と考える。

1は、遺存長⁽³⁾4.5cmを残す。胎土中には極く微量の粉粒化した長石・金雲母を含む。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。器厚は1.3cm、復原口径38cmである。内外面共にナデが施される。トレンチ内東18・19層出土。

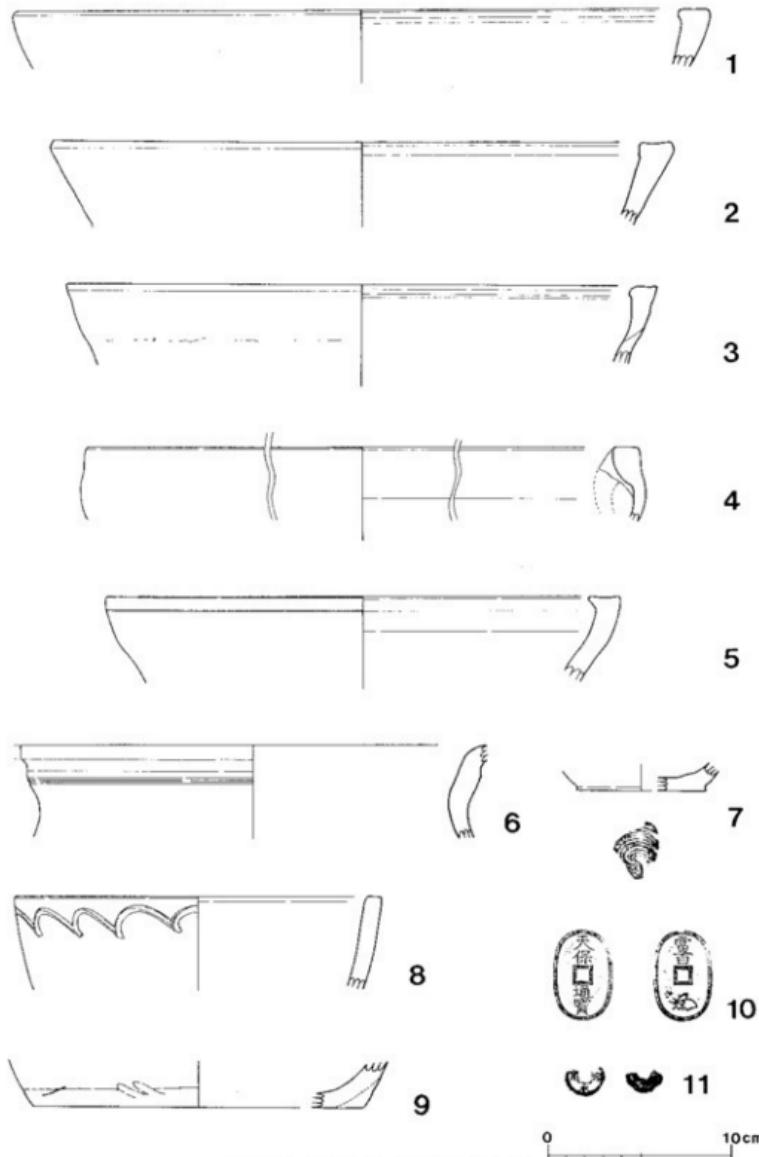
2は、遺存長5cmである。胎土中には長石粉粒・石英粒・黒色微砂を少量含む。焼成は良好で、色調は外側がややくすんだ淡橙褐色、内側が淡橙色である。器厚は口縁部で1.7cm、体部で1.0cmを計り、底面に従って薄くなる。復原口径は34cm。口唇部内面にはヨコナデが、外側には荒いナデが加わる。口唇部から内側にかけては縫幅8mmで面取られ、やや外反気味となる。18・19層出土。

3は、遺存長10cmである。胎土には長石粒・石英・金雲母粉粒をやや多く含む。焼成は良好である。色調は外側が暗褐色、口唇部より内側にかけては橙味をおびた灰色である。器厚は口縁部で1.4cm、体部で0.8cm、復原口径32.2cm。口唇部上端から外側にかけて、1.5cm～2cm幅で炭化物が付着する。形状は、体部より斜めに立ち上がり、器壁を増しながらやや直立気味に開く。口唇部から内側は2と異なり、やや斜めに面取られる。中央下層出土。

4は、遺存長約7cmを計る。胎土は長石粒を微量に含み、精良である。焼成も良好である。色調は、外側は炭化物が付着して黒褐色を、口唇部より内側にかけては淡い橙白色を各々呈する。器厚は口唇部で1.5cm、体部で0.4cm、復原口径40cm。内側に耳の欠落痕がある。形状は、やや膨らみをもつ体部より内湾気味に立ち上がりながら、口唇端部の平坦面へと通ずる。外側より口唇部はヨコナデ、内側はナデと指頭圧痕が見られる。18・19層出土。

5は、遺存長約7cmである。胎土には石英・長石粒を少々、金雲母粉粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は外側が暗褐色、内側が橙味がかった褐色である。器厚0.9cm、復原口径38cm。口唇部寄りの体部外側は、7mm幅で炭化物が付着し、口唇端部の平坦面に一部は及んでいる。形状は、斜めに開き気味の体部が徐々に直立化して口唇端部の平坦面に至る。口唇部から内側には、端部から生じた約5mm幅の張出しが見られる。全体がヨコナデにより整形される。18・19層出土。

6は、常滑型の口縁部である。外側の欠損部には、自然軸の付着具合から3cm以上の幅広い縫帶がつくものと考えられる。遺存長は約6cmである。胎土には長石粒を少量含む。焼成は堅緻である。色調は外側が褐色、内側は紫味を帯びた暗褐色、胎芯は黒褐色を呈する。器厚は1.0cm、復



第9図 第1トレンチ出土遺物（1）

原径は口唇上端で35cmを計る。遺存面には皆ナデが施されるが、縁帯が違う外面上には条線が2条、また内面下方の肩部寄りには指頭圧痕が見られる。縁帯は、近世壺に特徴的な2段ではなく、折り返し口縁の1段であることから、15~16世紀代の製品と考えられる。東方出土。

7はかわらけの底部片である。約1/5の遺存率である。胎土は極く微量の長石粉粒・金雲母粉粒を混えるも良土である。焼成は良好で、色調は淡い灰白色である。器厚は0.7cm、復原底径は約7cmである。底面には回転糸切痕、内底面には同心円状の回転性のナデが見られる。

8は、鉢類または火舍と考え得る土師質土器口縁部である。遺存長は約6cmである。胎土中には長石粒を含み、内外面には金雲母が目立つ。焼成は普通である。色調は橙味をおびた褐色である。器厚は0.9cm、復原口径20cm。外面口唇部寄りには、竹管状工具による弧状文が左から右へ連続配置される。口唇部は、箒状工具を用いた削りによる面取りが施される。内面は指頭痕をナデ消している。東方出土。

9は、土師質土器内耳鍋の底部と覺しき資料である。遺存長は約6cmである。胎土は長石粒と黒色微砂を微量に含む。焼成は良好、色調は橙味をもつ淡褐色である。器厚は1.0cm、復原底径約18cmである。外面・底面・内面は皆ナデを施す。特に、内面はよく使い込まれた滑らかさを保つ。18・19層出土。

10は、天保通寶である。初鋤は天保6(1835)年である。2層出土。

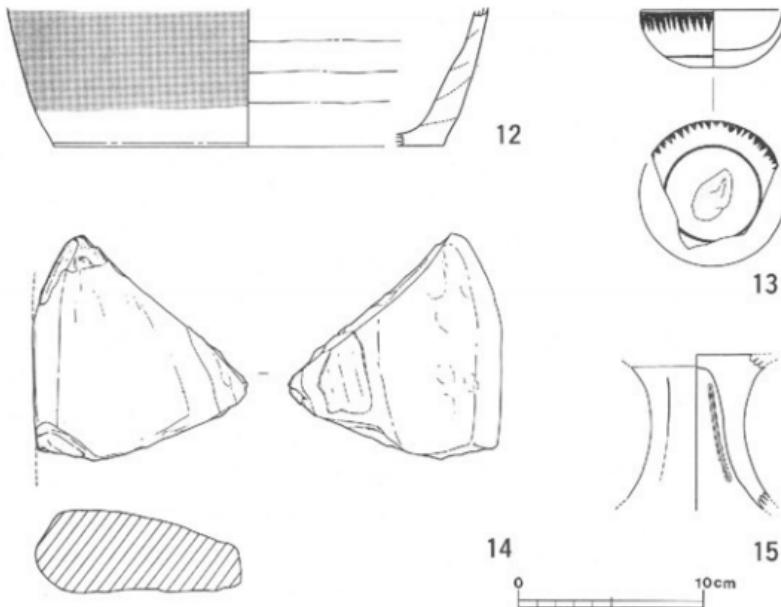
11は、寛永通寶(銅錢)である。酸化が著しい。初鋤は元文4(1739)年である。上層出土。

第10図も第1トレンチ内の出土遺物である。

12は、中世の土師質土器内耳鍋の底部と考えられる。遺存率は、底径の1/6程度である。胎土は長石粒を少量、白雲母・石英粒を微量含む。内面の剥落が多く、焼成は不良である。色調は内面及び胎芯が明褐色、外面は黒褐色である。体部外面は底面より2cm以上の部分から炭化物が付着する。器厚は体部で0.8cm、底部で0.6cm、復原底径21cmである。内面にはヨコナデが認められるほか、粘土紐を輪積みまたは巻き上げ成形した痕跡を残す。底部より体部にかけては、やや外側に向いて直線的に立ち上がる。18・19層出土。

13は肥前系染付の蓋物または小碗と思われる。遺存度は全体の1/4強である。胎土には褐色の粉粒物を極く微量に混じえる。焼成は堅緻。色調は胎芯がわずかに褐色を帯びた灰白色、釉はわずかに青味を帯びた透明釉である。器厚は底部で0.9cm、口縁部で0.3cm、復原口径約8cm。形状は、底部より緩やかに丸みをもって直立的に立ち上がる。底部を欠落するが恐らく輪高台状の部位がつくものと考えられる。外面には、中央より下部に1重の圓線が、口唇部寄りには筆を連続させて描いた、下向きの鋸歯文が配される。18世紀後半~19世紀前半頃の製品と考える。東方出土。

14は雲母片岩質の砥石で上面・側面以外は欠損している。上面と側面は鈍角で接し、下方の自然面へは緩やかな屈曲により連なる。使用面上には削痕は認められず、凹凸もない。組成としては、白雲母が多く含まれる。拡張区出土。



第10図 第1トレンチ出土遺物（2）

15は、奈良・平安時代の須恵器高杯脚部の破片である。胎土には白雲母粒を少量、長石粒を微量に含む。焼成はやや甘い。色調は淡い灰色である。脚部には対面する方向で2条の透かしが入る。杯部は底面以外を欠損する。新治産須恵器と考えられ、後世に混入した資料と判断される。器厚1.2cm。拡張区出土。

第11図も第1トレンチ内出土遺物である。

16は、砂岩質の砥石で大きさの点から恐らく荒砥または中砥として利用されたものと思われる。遺存度から4面分を利用していたものと考えられる。上面の最も広い利用面は、中央を凹ませるも平滑さを保つか、鉱物の欠落のために数箇所の穴をあけている。中央の使用面は最も幅狭く、礫表に接する使用面も若干中央部を窄ませる。礫表も滑らかなカーブを描いており、摩耗していることが分かる。拡張区出土。

17も砂岩質の荒砥または中砥で、本来直方体状をなしていたと思われる。遺存使用面は3面あり、うち1面は黒色変成し、弧状に摩耗した跡がみられる。組成中には白雲母粒を少量含む。拡張区出土。

第12図は、第2トレンチより出土した遺物である。

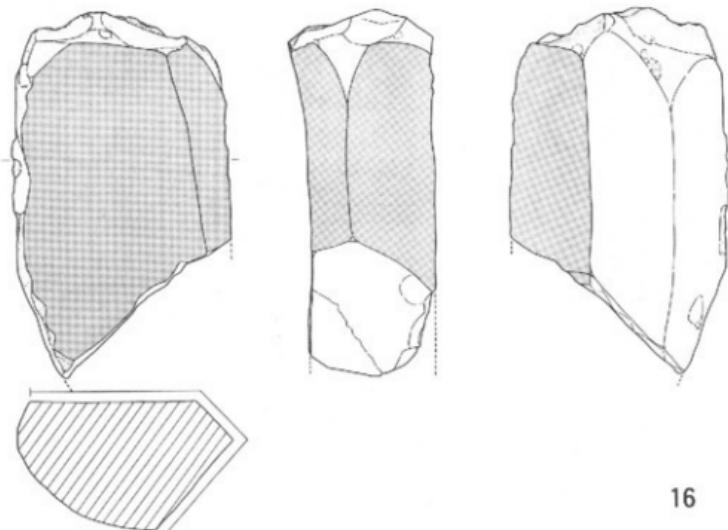
1は、肥前系磁器の皿である。遺存度は全体の1/2弱である。胎土は混入物をほとんど混じえぬ精良な土である。焼成は堅緻、色調は胎芯が白色を呈する。釉はほとんど厚みをもたず、高台部の接地面を除き、全面施されている。口唇部は褐色化している。具須による上絵付けの文様は、内面は5弁の花をモチーフとしている。最も内側には葉状の表現が周回し、2条の圓線を介して花弁が配置される。花弁の端は切り込みが入り、その外部延長には葉脈状の表現が続く。花弁の間には弁端に切り込みをもつ5葉の花が配される。具須にはにじみが無く、塗布された部分には斜線を密に配した箇所があり、線描ではなく印刷されたことを窺わせる。器厚0.4cm、復原口径14.2cm、底径8cm、器高2.9cm、高台高0.3cmを計る。時代的には明治時代以降のものであると思われる。2層・5層出土。

2は肥前系磁器の染付皿底部である。遺存度は底部1/3強である。胎土は黒色微砂を微量混入し、気泡が微かに生じている。焼成は堅緻。色調は胎芯が白色、釉は透明である。形状は、平坦な蛇ノ目凹形高台から漸増しつつゆるやかに立ち上がる。高台高は1cmである。釉は遺存面には全て塗布されているが、底面は輪状にかき取られている。外面の文様は、斜位に葉状の表現がみられる他、高台外面に2条、体部高台寄りに1条の条線が入る。見込み部分には花の側面觀が、3葉の花弁を見通す形で描かれる。花弁中央には葉の側面觀もみられる。その外側には3葉1単位の葉状の表現がある。内底面立ち上がりにも葉状表現があり、類似文様が連續配置された可能性をもつ。器厚は底部で0.6cm、体部で0.4cm、復原底径9cm。時期的には、18世紀後半～19世紀前半頃のものであろう。2層・5層出土。

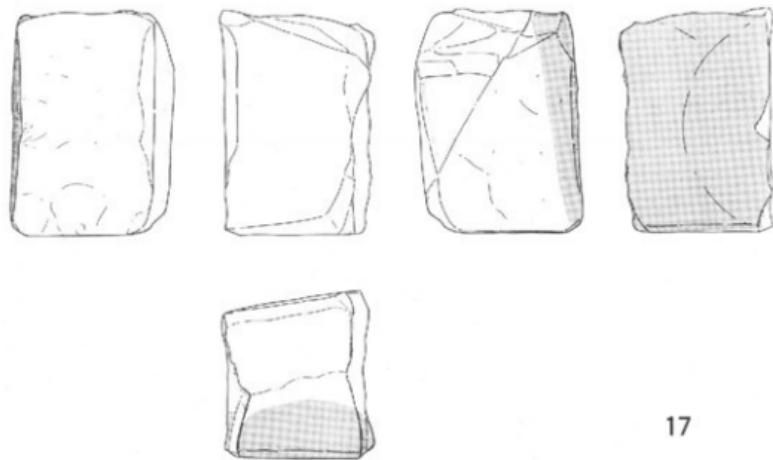
3は上絵付碗である。全体の1/2強を残す。胎土は褐色微粒子を少量混入し、焼成は堅緻である。色調はやや褐味を帯びた白色である。釉は高台接地面も含めて全面施釉される。文様は外面に菊花文が描かれる。菊花文は桃・緑色に染め付けられた上に、黒色顔料で線描され、白・金色で点描する。葉や流水状の表現も金・朱色顔料で描かれる。高台寄りには黒色の2条の条線が巡り、外底面には朱色で「九谷」銘が入る。口唇端部は褐色で縁取られる。器厚は0.4cm、復原口径8cm、底径4.5cm、高台高0.7cm。時期的には明治時代以降のものであろう。2層・5層出土。

4は、肥前系磁器の染付皿である。遺存度は全体の1/5程度である。胎土は黒色微砂を微量に混じえる。焼成は堅緻、色調は胎芯が白色、釉は透明である。文様は見込みに青・赤色の線描で花と葉の内面は微細な格子線文で埋められ、印刷によるものと考えられる。内面口唇寄りには一重の圓線が巡る。器厚は底部で0.6cm、体部で0.4cm、復原口径14cm、復原底径2.8cm、器高2.8cm、高台高0.5cm。明治時代以降の作と思われる。2層・5層出土。

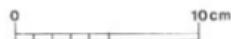
5はかわらけである。全体の約1/3を残す。胎土は赤色微砂・金雲母粒を微量に含む。焼成は良好で色調は橙褐色を呈す。形状は、回転糸切りの底部から徐々に外反し、棱が生じる程、ヨコナデが加わる。内面も横ナデ整形されるが、見込みには指頭によるナデが加えられる。器厚は0.5cm、復原口径9.0cm、復原底径4cm、器高3cm。本例同様に外面内ロクロ目が強いかわらけが、



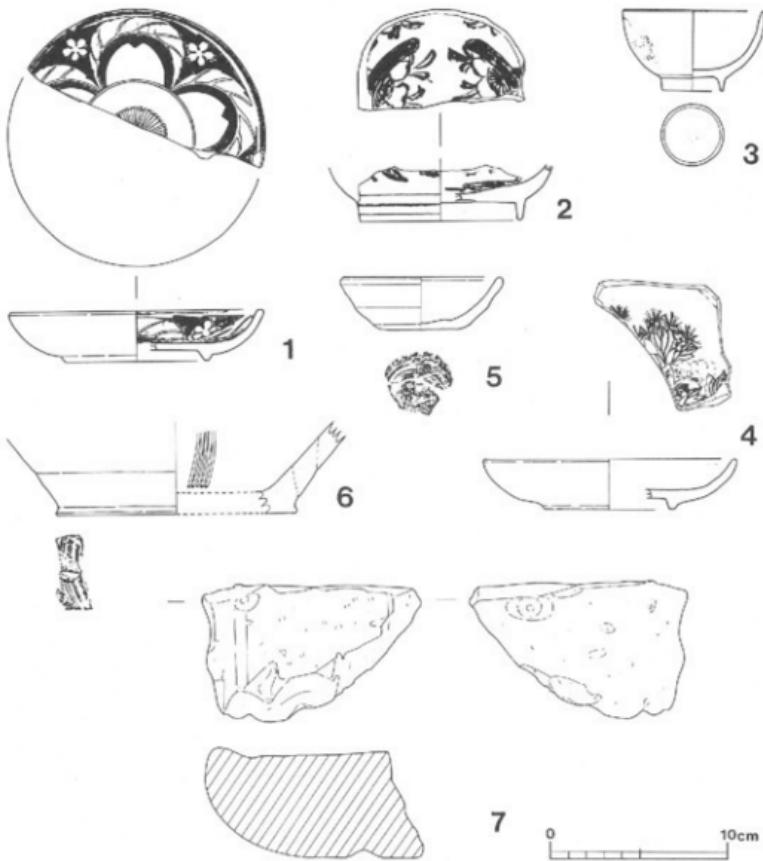
16



17



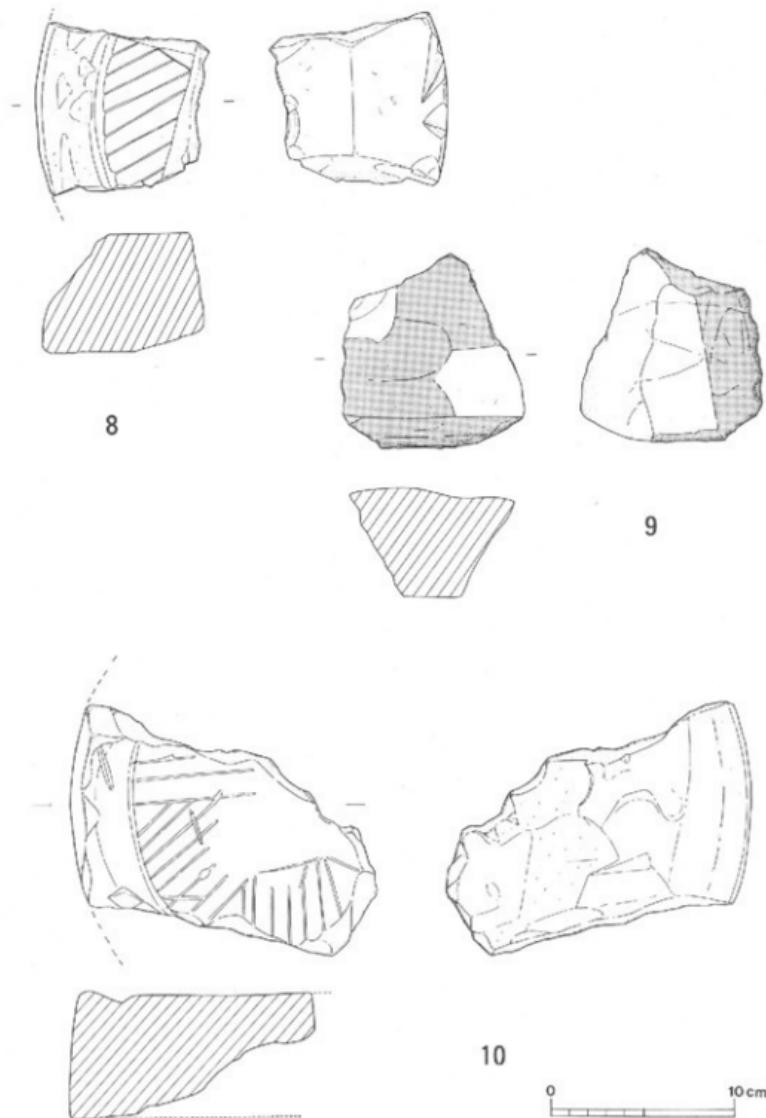
第11図 第1トレンチ出土遺物（3）



第12図 第2トレンチ出土遺物（1）

土浦城址²²⁾からも出土しており、時期的には江戸時代のものであろう。10層出土。

6は瀬戸美濃系陶器の掘り鉢底部である。遺存率は底径の1/8程度である。胎土は赤色微砂・石英粒を若干含んでいるが精良である。焼成も堅緻である。色調は、胎芯が淡黄褐色、内外面が錆軸を塗布しているために褐色を呈する。器厚は体部で0.9cm、底部で1.2cm、復原口径23.5cm。底面は回転糸切痕を有し、内外面には回転による横ナデを施す。内面には5条1単位のおろし目が上方に向かってのびる。内面にも錆軸が付着するが、滑らかさを保っているため、使用頻度が高かったことが分かる。



第13図 第2トレンチ出土遺物（2）

7は、多孔質安山岩製の石皿である。使用面は側縁で上方に立ち上がり、この立ち上がる端部が外周するものと考えられる。使用面上には2箇所穿孔され、裏面にも1箇所穿孔される。平均的な厚さは約5.5cmである。井戸側裏込め出土。

第13図は第2トレンチから出土した石製品である。

8は石臼で、第13図3と同一個体の可能性が高い。使用面上には、深さ約0.5mm、条間約8mmの8条の条線が同一方向に線刻される。使用面は良く摩耗しており、その外周は粉ための溝が穿たれ、弧状をなす。復原直徑28.8cm、厚さ6.4cm。組成中には石英を混じえる。上面は摩耗せず、凹凸をもつ。側面は上面より下方に約2cm幅の張出し部分をもつ。全体の調整は裏面と等しく、凹凸を有する。井戸使用面上層出土。

9は砥石で、第11図2と同一個体の可能性がある。遺存使用面は1面のみで、残りは皆破面である。全体に黒色變成しており、被熱によるススの付着がみられる。使用面上もススが付着するが、研磨した部分には煤はみられない。

10は石臼上部の破片である。復原直徑31.2cm、厚さ約7cmを計る。組成中には石英を含む。使用面上には、深さ0.5mmで8条を1単位とする溝が3単位連なる。中央部は良く摩耗し、溝は消失している。溝と外縁との間には深さ約5mmの粉だめの溝がめぐる。使用面から側面約1.5cmにかけて、断続的ながら黒色变成している。井戸使用面上層出土。

上記の遺物群は、磁器に限っては18世紀後半以降、陶器・土器については15~16世紀に遡る可能性をもつものがある。出土遺物はいずれも細片であり、意図をもって遺棄されたものではなく、井戸使用時か機能損失後に廃棄されたものと考えたい。

井戸山遺跡の井戸遺構を中世の土木工事としてみると、ローム層下の湧水点まで人力で掘り込むというかなり大規模なものであったといえる。想像を逞しくすると、この井戸を利用・保持していたのは、集団的・村落共同体的なものではないだろうか。全般的に遺物量が少ないという点は、井戸を使用した人々の廃棄行為に規制があったものと考えられる。

註1) 遺存長とは、残存率が算出しにくい程に遺物が細片であるため、残存する破片の横位の長さを測ったものである。直立する遺物に対しては、巻尺を用いて測定した。

註2)『茨城県指定史跡「浦城址発掘調査報告書』(1989) p.35 第18図23より

7. 調査のまとめ

今回の調査の結果、井戸山遺跡の窪地は名前のとおり井戸跡であったことが明らかとなった。この井戸跡が使用されていた時期は、出土した遺物から中世後期（15世紀後半～16世紀）頃に位置付けられる。江戸時代以降は遺跡内に廃棄物が投棄されている。

以下は本井戸跡の構造名称を遺跡の調査結果に即し新しく設定したので、それらの構造ごとに本遺跡を捉え直してみたいと思う。また、元来本遺跡は「まいまいいず井戸」と類似した構造を持つものと考えられて来た。このことについて、「まいまいいず井戸」と本遺跡を比較し、両者の相違点や類似点を整理してみたいと思う。

1. 井戸の構造

本遺跡の井戸跡を考えるにあたり、まずA井戸側部、B窪地部、C土堤の項目を設け、そしてA B Cの各項目内に小項目1 2 3…を設けた。これらの各部分の総体が井戸跡の構造となろう。

井戸跡 | A井戸側部 (a 1井戸側、a 2井戸側掘り方、a 3裏込め)
| B窪地部 (b 1窪地、b 2窪地掘り方、b 3窪地覆土)
| C土堤

A井戸側部は、(a 1井戸側、a 2井戸側掘り方、a 3裏込め)を包括する部分で、井戸跡の中でも水を汲み上げる意味で中枢的な役割を果たす部分といえる。この部分は第2トレンチ内で確認されたものである。窪地掘り方を直径7mを越える規模で不整円形に掘り込み、その中に井戸側を構築している。井戸側掘り方を設ける意味については、窪地部掘削の目的とも関連すると考えられるが、掘削作業における危険防止や井戸側の強度保持に関わるものと考えられる。井戸側と井戸側掘り方の間は人為的に埋め戻され、裏込めされている。この裏込めは井戸側を設置するためのものと考えられる。井戸側は黒色土として確認され、平面形が一辺1.5m以上の方形を呈するものと考えられ、本来は板材を使用した「枠」状の構造物と思われる。裏込めした土層の崩落を防ぐ役割を持ち、水を汲み上げるという機能の存続に関わる部分といえる。

B窪地部は、(b 1窪地、b 2窪地掘り方、b 3窪地覆土)を包括している。窪地は調査前の現況の遺跡内の窪地を指している。形状は上面形が不整三角形を呈し、底面形は梢円形を呈する。この上面形の主軸はおよそN-50°-Wの位置にあり、主軸長がおよそ25m、底辺の長さは18mのである。窪地掘り方は第一トレンチの調査状況により一部明らかとなっている。窪地掘り方は窪地覆土（窪地内堆積土）を取り除いた地山面である。この底面の形状は緩い傾斜の窪地状を呈するものと思われる。最深部は黄白色砂礫層まで掘り込まれ、浅いところでは砂礫層まで達している。最深部の深さは、窪地外の地表面から約5.5mの深さを測る。窪地覆土は窪地掘り方に堆積した土層を指す。土層の堆積状況からすれば、自然流入によるところが大きいものと思われる。本窪地部掘削の目的については、井戸掘削作業時における危険防止が考える。また井戸使用時に

おける「流し場」や「作業場」などの付属施設的役割も担うものと考えられる。

C 土堤については、窪地掘り方の掘削時に搬出された残土とも考えられるが、これ自体にどれだけの意味を持たせて造られたものかは不明である。

この他、現状では確認されていないが、本来は井戸・窪地掘り方への昇降施設などの存在が想定される。

2. 「まいまいいず井戸」と井戸山遺跡の比較

本遺跡はそもそもその形態的特徴から、東京都西部から埼玉県などに見られる「まいまいいず井戸」や「漏斗状井戸」と呼ばれる井戸の形態に類似したものではないかと考えられていた。これらの井戸の特徴は、大型の井戸であり、地表面の掘り込みが大きく底面が小さい、すり鉢もしくは漏斗状を呈し、その最深部のほぼ中央に井戸側が設けられている。地上から井戸側部までの傾斜した壁に「螺旋状」または「はすかい状」の上り下りする道がつくられる場合があり、これがカタツムリの殻に類似することから「まいまいいず井戸」の名称が付けられている。このような井戸の構築の理由については、その立地する地質などが関係していると言われている。

井戸山遺跡においては、大型の不整形三角形の窪地掘り方底面の北側に井戸側が確認された。両者は、地表面から大規模に地山を掘り込んだ底面下に井戸側が設けられている点は共通し、純粹なすり鉢状とはいえないが、上面径に比べ底面径が狭い点も同様といえる。本遺跡の大きな特徴として、窪地掘り方の端に井戸側が構築されていることである。これは窪地が、井戸側構築のみのために掘り込まれているわけではないことを示すと思われ、本井戸跡に付随した付属施設的状況を呈しているといえよう。本遺跡の昇降施設についても、本来存在しているものと思われる。

このような井戸構築技術の果たす役割から両者を眺めると、地理的・地質的条件は異なるものの、掘削作業の危険防止や井戸側の強度保持などの効果をねらったものと考えられる。そして両者の井戸の性格としては、規模・構造から、共同作業で造られた共同井戸と類推できる。時代的には問題があるが井戸山遺跡をはさんで「宿前」「宿後」の字名が残っており、現在でも近接して八坂神社が存在している。井戸が機能していた時期の痕跡となりうるかも知れない。

このような井戸山遺跡であるが、茨城県内では同様な構造を持つものは現在のところ確認されておらず、この遺跡の特異性が伺われる。このような「まいまいいず井戸」と類似した構築技術の井戸跡が、地域を隔て分布地域外に存在する意味については今後検討を要する問題といえよう。また井戸山遺跡と「まいまいizu井戸」が同様な系譜のもとに存在するとすれば、両者を結ぶ媒体となるものが如何なるものなのかについても今後解明されるべき問題といえる。



遺跡周辺航空写真（国土地理院 S 50.1.19撮影）



遺跡近景（南より）



遺跡近景（北より）



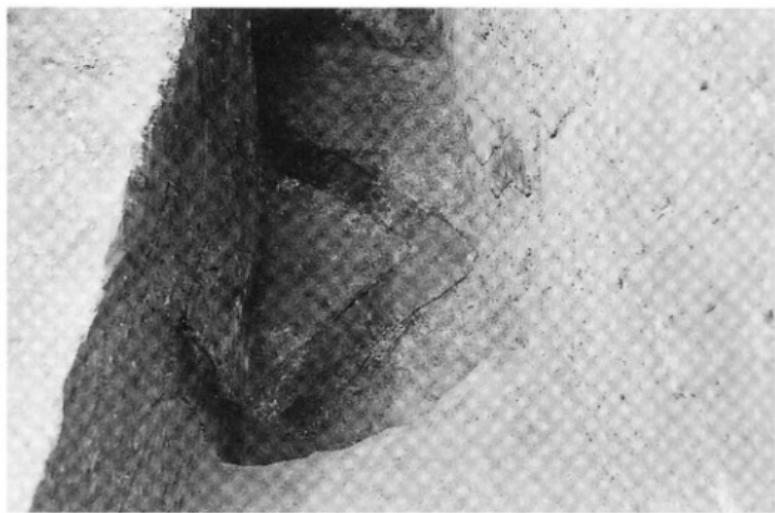
第1 トレンチ調査状況（西より）



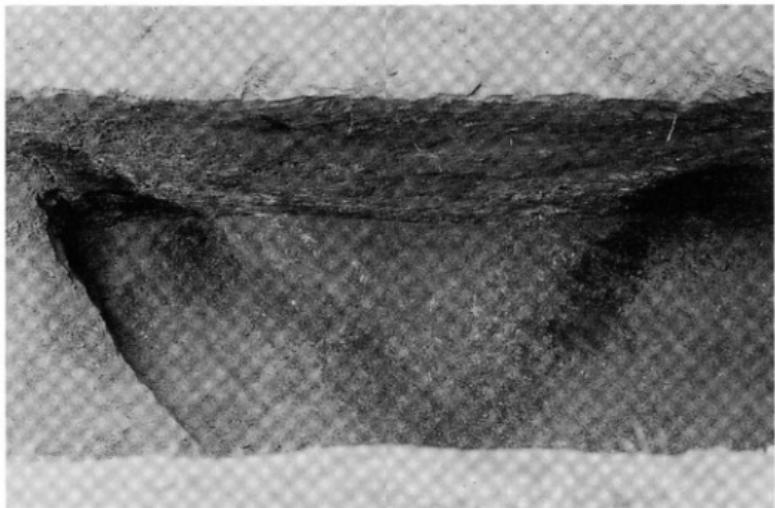
第1 トレンチ内遺物出土状況



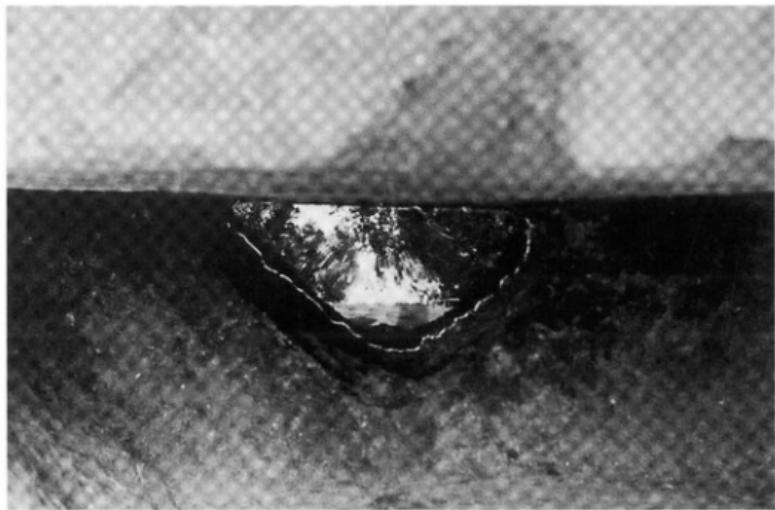
第2 トレンチ土層堆積状況（東壁）



第2 トレンチ井戸側検出状況（南より）



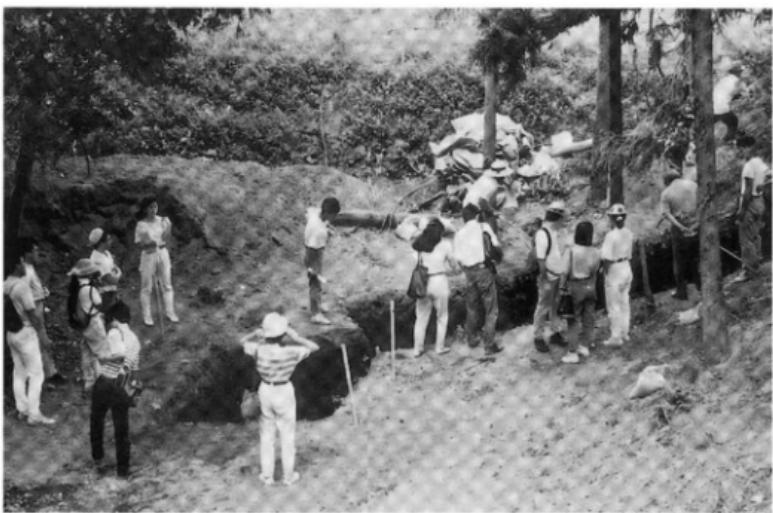
第2 トレンチ井戸側検出状況（東より）



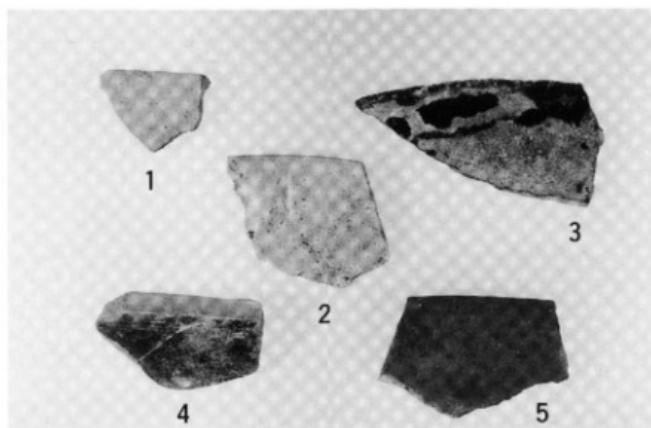
井戸側内の涌水状況



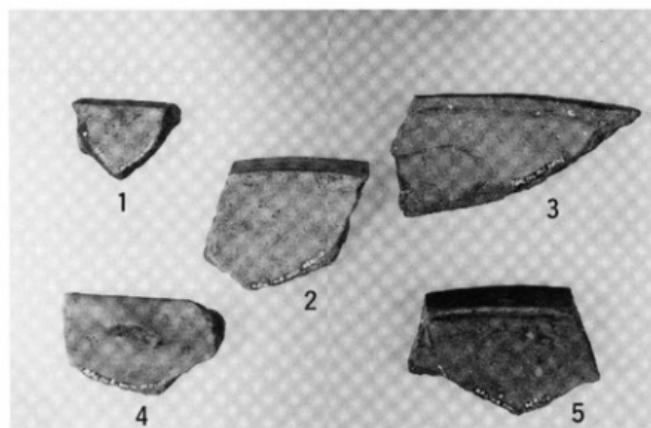
第1 レンチ調査作業状況（西より）



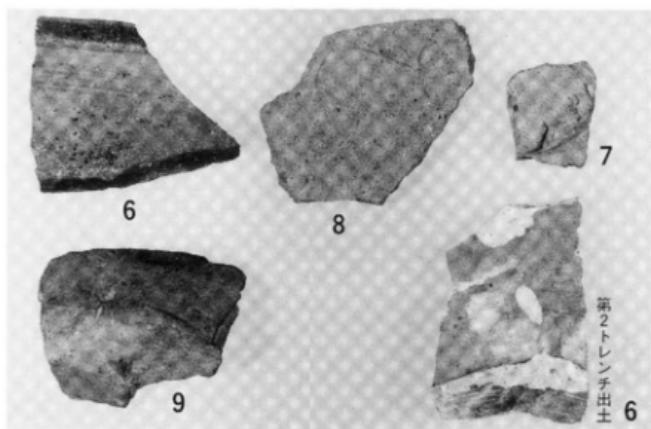
井戸山遺跡発掘調査現地説明会



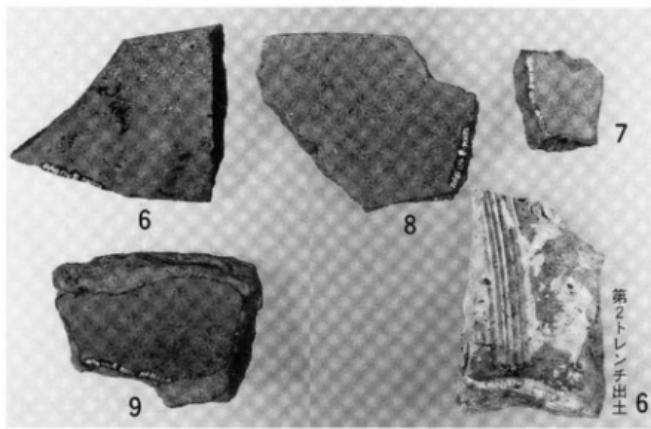
第1 トレンチ出土遺物（表）



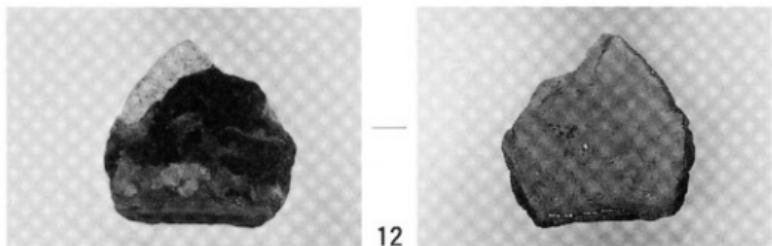
第1 トレンチ出土遺物（裏）



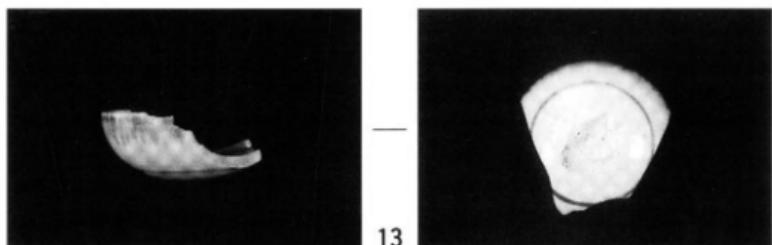
第1、2トレンチ出土遺物（表）



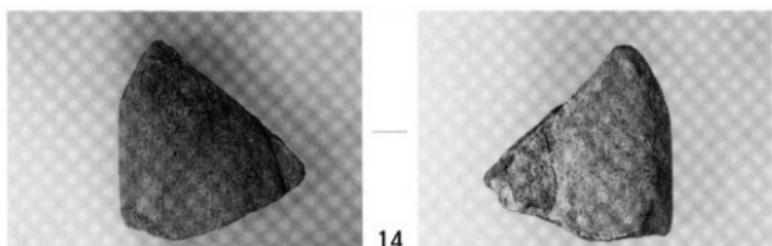
第1、2トレンチ出土遺物（裏）



12



13

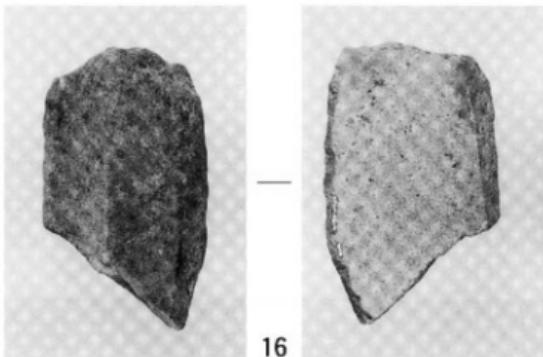


14

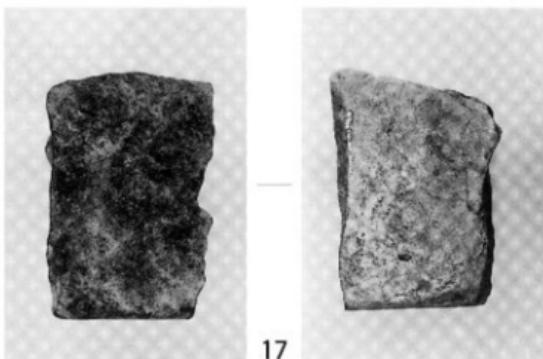


15

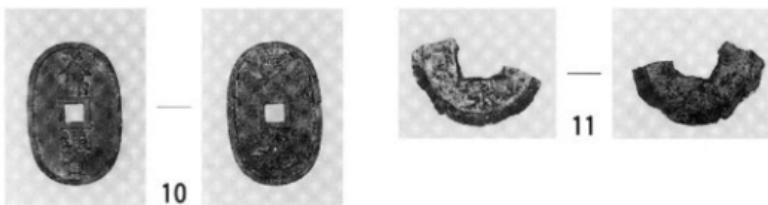
第1トレンチ出土遺物



16



17



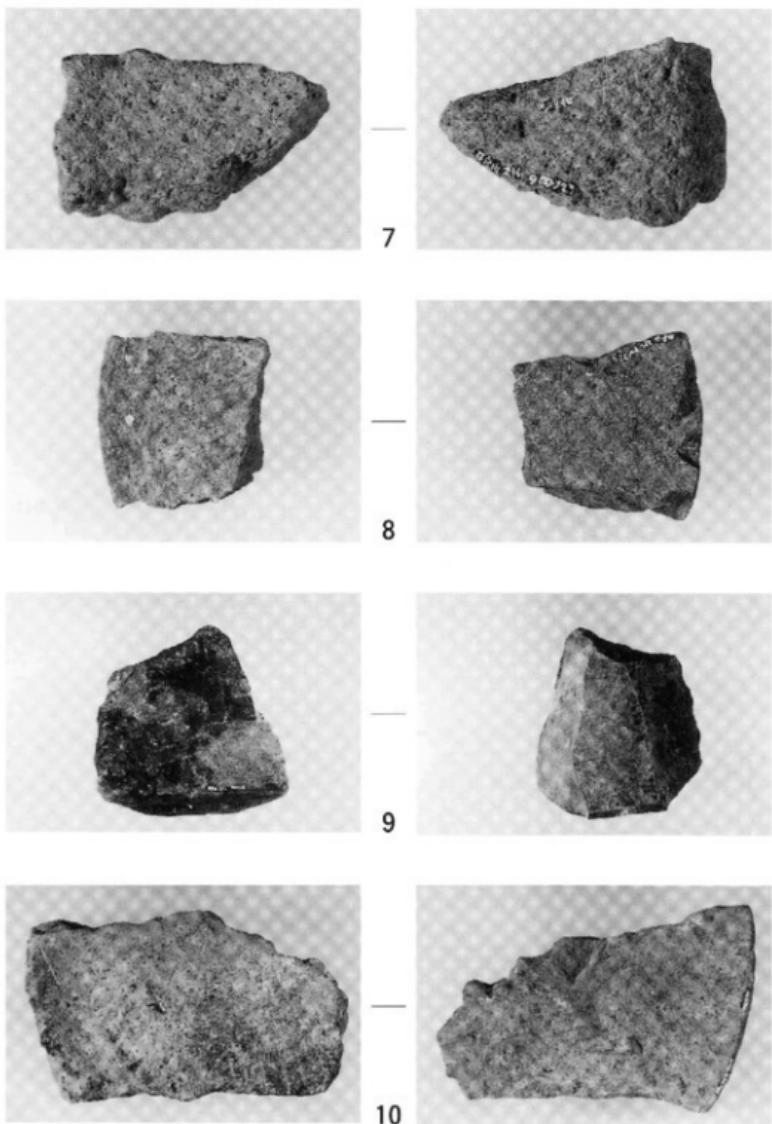
10

11

第1 トレンチ出土遺物



第2 トレンチ出土遺物



第2 トレンチ出土遺物

井戸山遺跡
確認調査報告書

発行日 1991年3月

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

印刷 株式会社いなもと印刷